令和元（２０１９）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
地域とともにある
勢いのある学校

No.25（R元．11．6発行）文責 校長 福田雅也

見て、聞いて、感じて…体験の大切さ

どうぶつたちのヒーロー

石本りず

生かつかの学しゅうで、高木小学校の校くにある鳥じゅうほごセンターに行きました。まずセンターのすぎ田さんから、どんなおしごとをしているのか聞きました。けがをした鳥やどうぶつをほごして、元気になったら、しぜんにかえしているそうです。センターには、サルやカラス、フクロウがいました。

私が一番心にのこったのは、りょう方の目が見えないハトのことです。りょう目が見えないので、とぶことができません。そのハトを見つけた人が、センターにれんらくして、そだてることになりました。

すぎ田さんは「鳥は目が見えないと、えさを食べることができません。センターにれんらくした人のやさしさのおかげで、この小さないのちが助かったのです。」と話されました。

その話を聞いて、ほごセンターはどうぶつたちのヒーローだと思いました。どうぶつたちをそだてているセンターの人たちや、どうぶつのいのちを大切にする人たちのやさしい気もちが、たくさんあつまっているからです。

この学しゅうでいのちの大切さを考えることができたので、いのちを大切にできる人になりたいです。

これは、本日（令和元年11月6日）付け、熊本日日新聞朝刊の若者コーナーに掲載された、本校の2年生、石本りずさんの感想文です。文中にもあるように、2年生が生活科の学習で、校区内にある熊本県鳥 獣保護センターに見学に行った時の感想を綴った作文です。

素敵な文章だと思われませんか。目の前で、命をつないだ盲目のハトを見て、育てている方の思いを聞いて、命の大切さを感じ、自分もそうありたいと実感することができたのです。りずさんの豊かな感性が一番ですが、それとともに、見学という体験があったからこそ生まれた感想だと思います。生活科の学習ですから、学習の目的は、地域にある施設を知ることやその施設の役割を知ることだったはずです。2年生担任も、そこに盲目のハトがいて、杉田所長さんが感想文にあるような話をされることまでは、打ち合わせてなかったそうです。作文からも分かるように、りずさんは生活科の学習の目的をしっかりと達成した上で、「命の大切さ」という、意図的に感じさせようとしても簡単に感じることができない思いを実感することができたのです。

これが、体験のもつ大きな力だと改めて感じさせてくれた作文でした。

また、地震の影響を受け、見学者がほとんど来なくなっていた鳥 獣保護センターの方々にとって、今回の2年生の訪問やりずさんの感想文（感想文はすでにセンターへは送ってありました）は、大きな喜びになったことを2年生担任から聞きました。

加えて、このように新聞に掲載されることで、高木小学校の子どもたちの頑張りや素晴らしさを地域や町内の枠を超え、県内に発信できたことも思わぬ喜びでした。

地域の素晴らしさを体験を通して学ぶこと、その内容を思い切って発信していくこと、それらのことが、地域や学校の元気や勢いにつながっていくことを実感させてくれた感想文でした。